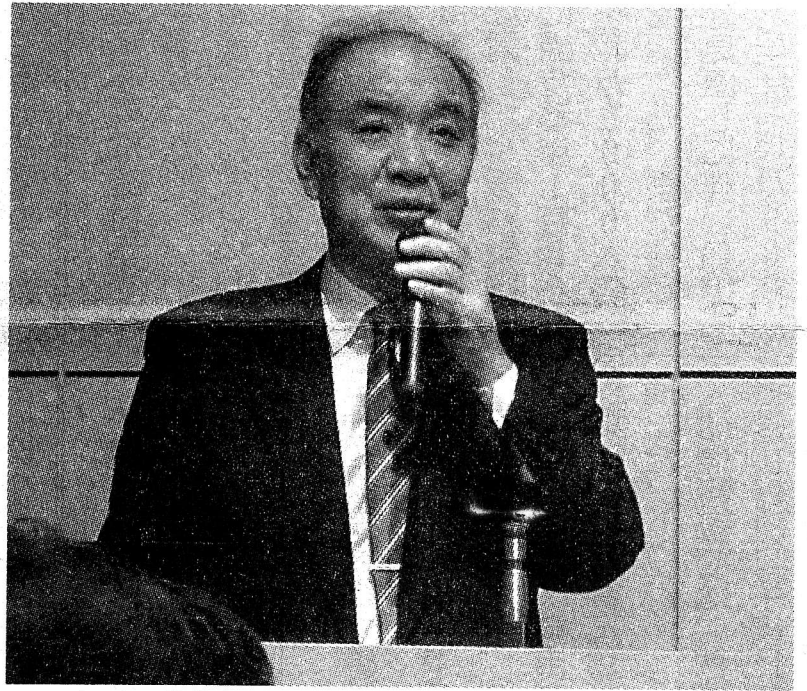


食べ物が病気を作る

鶴見隆史さんが講演—つくば

無知からの脱却必要



米国の動物園では食物をすべて生ものにしたら動物の病気がなくなったと話す鶴見隆史さん—つくば市竹園のつくば国際会議場

—トジャパン主催。

酵素栄養学の第一人者とされる鶴見隆史さんが講演「がん治療革命」を行った。鶴見さんは1948年生まれ。幼い頃に苦しんだ持病の喘息（ぜんそく）が大量の生キヤベツ摂取によって全快、しかしチョコレートやピザ、マーガリンなどを大量に食べた高校生の時にひどい喘息発作が再発した

経験から、病気と食べ物との関係を自覚。しかし進学した医大では病名と薬だけが大事、食物は関係せずと授業内容が「受け入れがたく、苦痛だった」という。その後栄養学を学び都内に医院を開業、酵素栄養学を中心とした治療を行っている。

医師たちの世界の封建性に触れた後、「健康になり

たかったらライフスタイルを変えよ」と、マーガリンなどのトランス脂肪、牛乳やチーズの乳製品が体にもたらす害を指摘。また下剤のキノホルムによるスモン病やステロイドホルモン、血圧降下薬などを例に「薬好きの怖さを認識して」と語った。「免疫の70%は腸にある」と、腸の役目も述べた。種子や玄米には毒性の酵素抑制剤が含まれており、食べる際には12時間以上水に漬けることが必須と強調した。

50年にはゼロだった前立腺がん患者が今は1万人。奇形児出産も多く日本は病気が大国となっており「無知からの脱却が必要」と訴え、「薬に頼らず不安になりすぎず血液をサラサラに」と呼びかけた。

「がんの本質とあなたを救うヘルスケア」と題して講演した同法人理事長の野本篤志さんは、がんの修復遺伝子P53の働き方について

て説明。ストレスや不安をため込む事の多いがん患者は「大丈夫だよ」「ま、いいか」を日々自分に言い、「すみません」の代わりに「ありがとう」をたくさん言おう、などと話した。

(赤嶺容子)

常 陽 新 聞

2011年(平成23年)11月2日(水曜日)